

# 尿路結核知見補遺 第1報 臨床統計的觀察 第2報 予後

著者	黒坂 真
号	330
発行年	1966
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/18257">http://hdl.handle.net/10097/18257</a>

氏 名 ( 本 籍 )      くろ      さか      まこと  
黒      坂      真

学 位 の 種 類      医      学      博      士

学 位 記 番 号      医      第      3      3      0      号

学位授与年月日      昭 和 4 1 年 3 月 4 日

学位授与の要件      学位規則第5条第2項該当

最 終 学 歴      昭和 3 1 年 3 月  
福島県立医科大学卒業

学 位 論 文 題 目      尿路結核知見補遺  
第 1 報    臨床統計的観察  
第 2 報    予後

( 主   査 )

論 文 審 査 委 員    教授 穴 戸    仙太郎    教授 檜      哲 夫

教授 葛    西    森    夫

## 論 文 内 容 要 旨

最近における尿路結核の実態を把握するために、昭和34年4月より39年3月までの5年間に東北大学泌尿器科に入院して治療を受けた患者242例を対象として臨床統計的観察を行い、さらにその治療効果の成否を判定するため同じ患者のうち退院後1年以上経過した236例を検査対象として予後調査を行なった。

まず臨床統計的観察についてみると、発生頻度は外来、入院ともに次第に減少する傾向を示し、入院患者総数に対する尿路結核入院患者の比率も昭和34年21%から38年9%に減少した。

年齢は30才台が86例(36%)ともつとも多く、ついで20才台59例(24%)、40才台55例(23%)で、60才以上も9例みられ、患者年齢が中、高齢者層に移っているのが窺われた。

初発症状および主訴はともに膀胱症状とくに頻尿がそれぞれ113例(47%)、75例(31%)ともつとも多かつた。

患側は右81例(33%)、左88例(36%)、両側73例(30%)であつた。

結核性既往症についてみると既往症を有するものは144例(60%)で、肋膜炎53例(22%)、肺結核35例(14%)、性器結核32例(13%)、骨関節結核24例(10%)の順であつた。

結核性合併症は性器結核が75例(男性に対し54%)ともつとも多く、ついで肺結核、骨関節結核の順であつた。

尿所見についてみると、全対象では清澄尿37例(15%)、蛋白陽性191例(79%)、結核菌染色、培養いずれかで陽性となつたもの120例(50%)であつた。しかし化学療法未施行79例では清澄尿6例(8%)、蛋白陽性71例(90%)、結核菌染色、培養いずれかで陽性となつたもの58例(73%)と有所見例が多くみられた。

腎盂し線像はLattimerの分類に従うと、第4群116例(48%)ともつとも多く、ついで第2群56例(23%)、第3群44例(18%)の順となり、腎盂し線像の高度病変例が多いことは今日でもなお尿路結核を発見する時期が遅れがちであることを示しているといつてよい。

治療法についてみると、化学療法のみは72例、手術施行患者は170例であつた。手術の

種類では腎摘出術が109例ともつとも多いが、保存的手術として腎部分切除術17例、空洞切開術9例、膀胱形成術としてTasker手術の変法10例、Scheele手術5例等も行なわれ、近年特に保存的手術や膀胱形成術が多く行なわれるようになりつつある。

化学療法期間は2～3年が100例中27例でもつとも多く、ついで1～2年の23例であった。

つぎに予後についてみると、236例を対象として234例の消息が明らかとなり、消息判明率は99.2%であった。

全対象例の予後は全治169例(72%)、健康45例(19%)、軽作業6例(3%)、療養中5例(2%)、死亡9例(4%)で治癒率は91%であった。

死亡9例のうち尿路結核の再発を死因するものは5例で他の4例は非結核性のものであった。

年度別にみた予後は34年93%、35年90%、36年85%、37年90%、38年98%の治癒率でほぼ一定していた。

年齢よりみた予後では10才台100%、20才台95%、30才台92%、40才台90%、50才台81%、60才以上89%の治癒率で中・高年者が若年者に比較して予後は悪かった。

腎盂し線像よりみた予後は0群が98%ともつとも高い治癒率を示し、ついで1群97%、2群84%、3群36%の順であり、4群は治癒率0であった。すなわち腎盂し線像の病変軽度である程予後は良好で、早期発見早期治療の原則が痛感された。

最後に治療法よりみた予後についてみると、保存的手術が100%ともつとも高い治癒率を示し、ついで腎摘出術95%、化学療法のみ90%、膀胱形成術69%の順であり、手術の選択にはなお慎重である必要が感じられた。

## 審 査 結 果 の 要 旨

著者は昭和34年4月より39年3月までの5年間に東北大学泌尿器科に入院して治療を受けた患者242例を対象として臨床統計的観察を行なった。さらにその治療効果の成否を判定するため、同じ患者のうち退院後1年以上経過した236例を検査対象として予後調査を行ない、最近における尿路結核の実態を把握した。

まず臨床統計的観察についてみると、

発生頻度は外来、入院ともに次第に減少する傾向を示し、入院患者総数に対する尿路結核入院患者の比率も減少した。

年齢は30才台がもつとも多く、ついで20才台、40才台の順で、患者年齢が中、高年齢層に移っているのが窺われた。

初発症状および主訴はともに膀胱症状とくに頻尿がもつとも多かつた。また結核性既往症は肋膜炎、肺結核、性器結核、骨関節結核の順であつた。

つぎに結核性合併症は、性器結核がもつとも多く、ついで肺結核、骨関節結核の順であつた。そして尿所見では化学療法未施行例は全対象例に比較して有所見者が多くみられた。

腎盂レ線像はLattimer の分類に従うと、第4群がもつとも多く、ついで第2群、第3群の順となり、腎盂レ線像の高度病変例が多いことは今日でもなお尿路結核を発見する時期が遅れがちであることを示している。

治療法についてみると、化学療法のみは72例、手術施行患者は170例であつた。手術の種類では腎摘出術がもつとも多かつたが、近年特に保存的手術や膀胱形成術が多く行なわれるようになりつゝある。化学療法期間は2～3年がもつとも多く、ついで1～2年であつた。

つぎに予後についてみると、236例を対象とした消息判明率は99.2%に達し、従来の報告に比較して最高の成績が得られた。

すなわち治療法と予後の関係をみると、化学療法のみで治療した場合、治癒率は89%、腎摘出術の治癒率94%であつたが、腎部分切除術と空洞切開術では100%の治癒率となり、全症例の治癒率は91%となつた。

この成績を従来の報告すなわち化学療法が行なわれず、腎摘出術が唯一の治療法であつた時代の山本の治癒率33%、化学療法併用下で腎摘出術が行なわれるようになった時代の三浦の77%という成績に比較すると、化学療法下に各種の保存的手術を行なった著者の成績はきわめて良好であるということができ、尿路結核の治療は確実な進歩を遂げたといふことができる。

以上著者が最近における尿路結核の動向について明らかにした業績は充分学位授与の価値あるものと思われる。